春期福音特別集会（3）（京都）

羔の怒りと恕

――ヨハネ黙示録第６～７章――

１９８４年６月10日
小池辰雄

四つの封印　第五の封印　我らの血の復讐　羔羊の怒り　神の怒り　神の印　白き衣　白衣紋
の大集団　十字架道は同時に聖霊道

【ヨハネ黙示録６】

1羔羊その七つの封印の一つを解き給いし時、われ見しに、四つの活物の一つが雷霆のごとき声して『来れ』と言うを聞けり。2また見しに、視よ、白き馬あり、之に乗るもの弓を持ち、かつ冠冕を与えられ、勝ちて復勝たんとて出でゆけり。

3第二の封印を解き給いたれば、第二の活物の『来れ』と言うを聞けり。4斯て赤き馬いで来り、これに乗るもの、地より平和を奪い取ることと、人をして互に殺さしむる事とを許され、また大いなる剣を与えられたり。

5第三の封印を解き給いたれば、第三の活物の『来れ』と言うを聞けり。われ見しに、視よ、黒き馬あり、之に乗るもの手に権衡を持てり。6斯て、われ四つの活物の間より出づるごとき声を聞けり。曰く『小麦五合は一デナリ、大麦一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害うな』

7第四の封印を解き給いたれば、第四の活物の『来れ』と言うを聞けり。8われ見しに、視よ、青ざめたる馬あり、之に乗る者の名を死といい、陰府これに随う、かれらは地の四分の一を支配し、剣と饑饉と死と地の獣とをもて、人を殺すことを許されたり。

9第五の封印を解き給いたれば、曾つて神の言のため、又その立てし証のために殺されし者の霊魂の祭壇の下に在るを見たり。10彼ら大声に呼わりて言う『聖にして真なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給わぬか』11ここにおのおの白き衣を与えられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との数の満つるまで、なお暫く安んじて待つべきを言い聞けられたり。

12第六の封印を解き給いし時、われ見しに、大いなる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、13天の星は無花果の樹の大風

に揺られて生後の果の落つるごとく地におち、14天は巻物を捲くごとく去りゆき、山と島とは悉くその処を移されたり。15地の王たち・大臣・将校・富める者・強き者・奴隷・自主の人みな洞と山の巌間とに匿れ、16山と巌とに対いて言う『請う我らの上に堕ちて、御座に坐したもう者の御顔より、羔羊の怒りより、我らを隠せ。17そは御怒りの大いなる日既に来ればなり。誰か立つことを得ん』

【ヨハネ黙示録7】

1この後、われ四人の御使の地の四隅に立つを見たり、彼らは地の四方の風を引止めて、地にも海にも諸種の樹にも風を吹かせざりき。2また他の一人の御使の、いける神の印を持ちて日の出づる方より登るを見たり、かれ地と海とを害う権を与えられたる四人の御使にむかい、大声に呼わりて言う

3『われらが我らの神の僕の額に印するまでは、地をも海をも樹を害うな』

4われ印せられたる者の数を聴きしに、イスラエルの子等のもろもろの族の中にて、印せられたるもの合せて十四万四千あり。5ユダの族の中にて一万二千印せられ、ルベンの族の中にて一万二千、ガドの族の中にて一万二千、6アセルの族の中にて一万二千、ナフタリの族の中にて一万二千、マナセの族の中にて一万二千、7シメオンの族の中にて一万二千、レビの族の中にて一万二千、イサカルの族の中にて一万二千、8ゼブルンの族の中にて一万二千、ヨセフの族の中にて一万二千、ベニヤミンの族の中にて一万二千印せられたり。9この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族・民・国語の中より、誰も数えつくすこと能わぬ大いなる群衆、しろき衣を纏いて手に棕梠の葉をもち、御座と羔羊との前に立ち、10大声に呼ばわりて言う『救は御座に坐したもう我らの神と羔羊とにこそ在れ』11御使みな御座および長老たちと四つの活物との周囲に立ちて、御座の前に平伏し神を拝して言う、

12『アァメン、讃美・栄光・智慧・感謝・尊貴・能力・勢威、世々限りなく我らの神にあれ、アァメン』13長老たちの一人われに向かいて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』14我いう『わが主よ、なんじ知れり』かれ言う『かれらは大いなる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。15この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。16彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。17御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』

●四つの封印

黙示録第6章にはいります。

1羔羊その七つの封印の一つを解き給いし時、われ見しに、四つの活物の一つが雷霆のごとき声して『来れ』と言うを聞けり。2また見しに、視よ、白き馬あり、之に乗るもの弓を持ち、かつ冠冕を与えられ、勝ちて復勝たんとて出でゆけり。

この「四つの活物」はゼカリヤ書6章にある。黙示録のいろいろな幻は、旧約の預言者たちが見たのが予表となって、新しく姿を変えて――数や、もちろん光景も違うけれども――旧約に応じて現れている。要するに旧約の預言がヨハネの黙示録において、黙示的な、顕示的な意味において、その世界の全き姿が現れているというわけです。ゼカリヤ書6章を見ると、

「1我また目を挙て観しに四輛の車二の山の間より出きたれり。その山は銅の山なり。2第一の車には赤馬を着け、第二の車には黒馬を着け、3第三の車には白馬を着け、第四の車には白点なる強馬を着く。4我すなわち我に語う天の使に問うて、我主よ是等は何なるやと言いけるに、5天の使こたえて我に言う是は四の天風にして全地の主の前より罷り出たる者なり。6黒馬は北の地をさして進み行き、白馬その後に従う。また白点馬は南の地をさして進みゆき、7強馬は進み出て地を遍く行きめぐらんとす。彼なんじら往き地を遍くめぐれと言いたまいければ則ち地を行きめぐれり。」（ゼカリヤ6・1～7）

とある。馬のことが予表としてゼカリヤ書6章1～8節に出ているわけです。ある学者は「白き馬」とはキリストであると言うけれども、どうもここのところはキリストではないようです。戦闘そのものを表す、なかなか強い――「白き」ですから、内容は悪くはないようですけれども――正に白馬の騎士だね、「白き馬」はキリストでないにしろ、勝利の象徴であることには間違いないわけです。

ゼカリヤ書1章に、

「1ダリヨスの二年八月エホバの言イドの子ベレキヤの子なる預言者ゼカリヤに臨めり云く、2エホバいたく汝らの父等を怒りたまえり。3万軍のエホバかく言うと汝かれらに告げよ、万軍のエホバ言う汝ら我に帰れ、万軍のエホバ言う我も汝らに帰らん。」（ゼカリヤ1・1～3）

という不思議な言葉がある。

「汝ら我に帰れ、我も汝らに帰らん」

と。「汝ら我に帰れ」とはただ「シューブー」というヘブライ語です。旧約聖書の預言書にはよく「帰る」という言葉が出てくる。これが「悔改」の元の字です。

「私もお前たちのところに帰っていくよ」

という、非常に懇ろに顧みる行動的な姿です。

3**第二の封印を解き給いたれば、第二の活物の『来れ』と言うを聞けり。**
4**斯て赤き馬いで来り、これに乗るもの、地より平和を奪い取ることと、人をして互に殺さしむる事とを許され、また大いなる剣を与えられたり。**

「赤き馬」というのは正に戦争の象徴だ。キリストが来る前に、苦患や饑饉や地震や戦争があるということは、キリストはマルコ伝13章で預言しておられる。

5**第三の封印を解き給いたれば、第三の活物の『来れ』と言うを聞けり。**
われ見しに、視よ、黒き馬あり、之に乗るもの手に権衡を持てり。6**斯て、われ四つの活物の間より出づるごとき声を聞けり。曰く『小麦五合は一デナリ、大麦一升五合は一デナリなり、油と葡萄酒とを害うな』**

第三の「黒き馬」とは饑饉のことです。神さまの審判の時は、地震や饑饉や疫病などがいろいろくるわけです。黒馬というのはそういった暗黒な情況を表す。小麦や大麦はもちろん食物ですが、小麦は常用のパンの方で、大麦よりも質がいい。「五合」とは原語では「コイニックス」といって、労働者の一日の食料が大体ここに計算されているようです。「一デナリ」というのは、兵隊や労働者の一日の賃金です。

7**第四の封印を解き給いたれば、第四の活物の『来れ』と言うを聞けり。**
8**われ見しに、視よ、青ざめたる馬あり、之に乗る者の名を死といい、陰府これに随う、かれらは地の四分の一を支配し、剣と饑饉と死と地の獣とをもて、人を殺すことを許されたり。**

「青」という色は死を表す。だから、勝利と戦争と饑饉と死・陰府といったようなものが、「馬」でもって象徴されている。「馬」は、そういうものがやって来るという徴なんです。これはみな審判の序曲であるわけです。死の前には疫病がはやったりします。

●第五の封印

9**第五の封印を解き給いたれば、曾つて神の言のため、又その立てし証のために殺されし者の霊魂の祭壇の下に在るを見たり。**

これはちょっと注目を要する。証のために殺された、殉教の死を遂げた霊魂を祭壇の下に見たという。

ヤコブ書4章に、

「1**汝等のうちの戦争は何処よりか、分争は何処よりか、汝らの肢体のうちに戦う慾より来るにあらずや。**

慾心が戦争のもとだという。全くその通りです。

2**汝ら貪れども得ず、殺すことをなし、妬むことを為れども得ること能わず、汝らは争い、また戦す。汝らの得ざるは求めざるに因りてなり。**3**汝ら求め**

てなお受けざるは、慾のために費さんとて妄に求むるが故なり。4**姦淫をおこなう者よ、世の友となるは、神に敵するなるを知らぬか、誰にても世の友とならんと欲する者は、己を神の敵とするなり。**5**聖書に『神は我らの衷に住ませ給いし霊を、妬むほどに慕いたもう』と云えるを虚しきことと汝ら思うか。**

とある。我々の霊が慾心とからんで悪いことをするけれども、実は、神さまは妬むほどに我々の魂を惜しんでいる、愛惜しているという。この我々の霊に聖霊がかかってこなければダメなんだ、というわけです。

6神は更に大いなる恩恵を賜う。されば言う『神は高ぶる者を防ぎ、謙だる者に恩恵を与え給う』と。」（ヤコブ４・１～７）**

これは旧約の箴言の言葉からきています。ヤコブ書４章にあるように、要するに、こういった四つの馬――白、黒、赤、青――こういったものを象徴するもとは何かというと、我々の中にある慾心だということです。そういったサタンの手下になって活動するような馬でもって象徴されるところは、人間の世界の惨憺たる現状です。

それに対して福音のために戦った人たちが、

9第五の封印を解き給いたれば、曾つて神の言のため、又その立てし証のために殺されし者の霊魂の祭壇の下に在るを見たり。**

というところになるわけです。「霊魂」という字は「プシヘー」という字で「生命」とも訳されます。即ち生命の生命は血ですから、この血が流された。

「血は生命のあるところ」

と創世記９章にも出ています。

●我らの血の復讐

10彼ら大声に呼わりて言う『聖にして真なる主よ、何時まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給わぬか』**

これは痛烈な言葉です。「聖にして真なる主よ」というのは、神さまを呼んでいるか、キリストを呼んでいるか、どちらにとっても構いませんが、もちろん、元は神ですけれども。「血の復讐」ということ。アベルの血から始まって、争いの血は歴史の終りまで絶えない。

「仇を返すは我にあり」

と詩篇の中にありますが、神さまは必ず仇を返す。「仇を返す」とは「審判をする」ということです。

キリストが十字架上で、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給いし」

というのも、これは一種の血の叫び、義の叫びですから。キリストは棄てられるはずのも

のではないわけなんです、神の義を全うしたひとですから。神にこれ従った羔は義人ですから、「義」は「羊の我」と書くように。

昔から、泣きの涙どころでない、血の叫びがいかに絶えないか。血の復讐は必ず神さまがなしたもう。これが「最後の審判」です。そのことは今日読むところにちゃんと出ている。

キリストは、羔羊は、十字架上でもって、

「あの訳のわからない者を赦してやってください」

と、赦しを神さまに祈っている。自分は十字架上で身を棄てながら、殺されながら赦しを祈っている。

「赦してやってください」

という、その赦しをも受けない連中がいるわけだ。

「キリストの罪の赦しを受けない」

ということは要するに、

「十字架を信じない」

ということになる。そして、

「そんなことがあるか」

なんて言って、逆らっているのがある。神を無みし、キリストを無みして勝手なことをしていると――羔羊の赦しは「恕（じょ）」の方です、思い遣りということ――十字架の「恕」が今度は「怒」に変わる。これが黙示録の最後に出てくるところの「羔羊の怒り」ということです。獅子の怒りよりも、羔羊の怒りの方が凄い。獅子はしょっちゅう唸っているが、羔羊は唸らないんだ、非常におとなしい。

「羔羊が怒る」

というのは全く概念の矛盾ですけれども。この赦しをも受けないようなことだったら、羔羊の怒りが来ると、それは本当に「第二の死」の方へ入る。霊法の世界、霊法は厳として存する。

カントは道徳法、道徳律のことを言った。『実践理性批判』の終りの方で、

「これを思うことしばしばにして、また深ければ深いほど、いよいよ我々の心を畏敬の念と驚嘆の念でとらえるものが二つある。それはわが内なる道徳の法とわが上なる星辰の空である」

と言った。即ち、自然界の、物理界の法則と、人間界の法則、これに対して非常に厳かな念にかられるとカントが言った。これは千古の名言です。そういう法の世界で、一番上の法則は霊法の世界です。奇蹟なんか在りはしない。全部、霊法です。奇蹟というのは、分からないから奇蹟と言っている。キリストはもの凄い事をなさった。あれはみな驚くべき霊法の世界です。この霊法は犯すべからず。道徳法だけではダメなんです、霊法に来ないと。道徳的世界秩序よりも奥に霊的な宇宙秩序がある、歴史の秩序がある。これを大いに破っ

ているようだが、どっこいそうはいかんと言って、歴史の終末には全部それが精算されるわけです。いい気になっているけれどもとんでもないと。この霊法がちゃんと成ることを叫んでいる祈りが、この羔羊の怒りになる。「羔羊の怒りと恕」です。

恕は愛の世界です。

「孔子の道徳はそれ恕なるかな」

と弟子が言った。

「孔子さんの言っていることは結局、思い遣りに尽きるかな」

というわけです。或は、「忠恕」という言葉もあります。この頃の特に都会では、思い遣りの少ない人間が多いようだ。その人の立場になってものを感じたり、考えたりしてやることが、思い遣りという。ドイツ語では「ミットライデン」「悩みを共にする」という。

「キリストは思い遣りのできる人である」

ということはヘブル書にも書いてある。キリストの思い遣りは、実力をもって相手の状態を変えてやる。そして、贖ってしまう。病だったら、治してしまう。心の病もまた治してしまう。とにかく、それをみな救いあげてしまう。キリストの思い遣りは救いにまでいってしまうわけです。

ところが、それを受けないで逆らって、傲慢にサタンの手下になって逆らっていると、今度は、羔羊の怒りがやってくる。この怒りにぶつかったら、もう十字架ではない、今度は地獄に、「第二の死」に落とされる。それは恐い。キリストも神殿で両替しているやつを叩き出したね、神の事態を瀆すなというわけで。あれは羔羊の怒りの予表だ。

「血の復讐」は

「ディバイン・リベンジ」（神聖なる復讐）

とでも言いますかね。ダンテの『神曲』は、詩をもって彼はディバイン・リベンジをした。ダンテも苦難のうちに故郷を追い出されてしまった。結局、彼は一人一党だ。ダンテというのは凄い魂だ。

この血の叫びの最初の殉教者がステパノです。使徒行伝7章に出てくる。彼はアブラハムからイスラエルの歴史を滔々と説いてきて、最後に、

「お前たちは聖霊に逆らう」

とはっきり言った。ステパノというのは本当に素晴らしい。

「あの訳のわからない者を赦してやってください」

と、彼はキリストの祈りをそのまま祈って仆れた。これにパウロは参ったわけです。だから、パウロの存在のもとに隠れたるステパノを忘れてはいかん。

11 **ここにおのおの白き衣を与えられ、かつ己等のごとく殺されんとする同じ僕たる者と兄弟との数の満つるまで、なお暫く安んじて待つべきを言い聞けられたり。**

もう少し待ってくれと。まだ福音のために殉教する人たちがあるから、もう少し待つべきだと。これが書かれているのは、迫害の時ですからね。もう少し迫害される者があって、いよいよ時が満ちたら、そうしたら血の叫びは聴かれるぞと。誰にも顧みられず、人に誤解され、悪者扱いにされて、死んでいった人たちもあるし、惨憺たるものだ。だから、本当の歴史というものは天界に映っているだけで、地上の歴史家が書いている歴史なんてものはどこまでが本ものだか分かりはしない。詩篇139篇の、

「汝知りたもう」

ということ。神さまに自分の魂の腰を据えてないとね。

●羔羊の怒り

12第六の封印を解き給いし時、われ見しに、大いなる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、13天の星は無花果の樹の大風に揺られて生後の果の落つるごとく地におち、14天は巻物を捲くごとく去りゆき、山と島とは悉くその処を移されたり。

これと似たようなことは、ヨエル書2章、イザヤ書13章、エゼキエル書32章、マルコ伝13章、ペテロ書などに出てくる。大変動が起きる。そうすると、どうですか、

15地の王たち・大臣・将校・富める者・強き者・奴隷・自主の人みな洞と山の巌間とに匿れ、16山と巌とに対いて言う『請う我らの上に堕ちて、御座に坐したもう者の御顔より、羔羊の怒りより、我らを隠せ。17そは御怒の大いなる日既に来ればなり。誰か立つことを得ん』

「羔羊の怒りより我らを隠せ」

と。ダメだよ、いくら隠れようとしたって。山と一緒に埋められてしまうよな。

そういうように、政治家たちは戦争を起こして、無辜の人たちを殺してしまう。大体、ソ連の人たちでも個人的に交われば何ということはないですよ。なぜこんなに大きな驚くべき武器をつくってお互いににらみ合うのか、全くバカげたはなしだ。それこそ本当は気違いだというわけだ。本当は、政治家と軍人が気違いだ。何も個人的に言っているのではない。そういうようなサタンの勢力の中に入ると、政治というものは、何だか知らないけれども、悪いことになってしまう。これはグラッドストーンも言っている。それから軍隊。武器を持っているから、ついやりたくなる。男の子はピストルだの剣だのを持ちたがる、先験的に。女の子は人形だけれども。男というのは本当に始末が悪い。だから、天国は女性の方が多いかもしらん。

オリンピックというのは、とにかく政治を乗り越えてお互いに競技の上で楽しくやりましょうというのに、政治がからんできて、それに参加しないなんてやっている。キリストが仰るとおり、幼児の如く童心をもたなかったら、どうしようもない。

「童心に帰れ」
ということです。
そうやって、復讐から逃れようとしても、この羔羊の怒りから隠れるわけにいかない。我々はキリストを、羔羊をわが隠れ場とする、詩篇によく出てくる
「避所（さけどころ）」
とする。羔羊の中に入る。これは難攻不落どころでない、絶対に落ちないところの城です。
「神は我らの堅き城なり」
とルターが言ったあの堅き城なんだ。羔羊の中に逃げていくと――「逃げていく」というと言葉がおかしいけれども――祈り入ると、力が入ってくる。詩篇46篇の第1節、
「神はわられらの避所また力なり、なやめるときの最（いと）ちかき助けなり。」（詩篇46・1）
という言葉がそれなんです。
「羔羊は、キリストは祈り入る所なり」
ということです。
悪いやつらは山の中に隠れようとしたって、いよいよ羔羊の怒りがきたら、これはダメだと。普通の人が黙示録の「羔羊の怒り」という言葉を聞いたら、何ごとかと思うだろうね。恵みを拒むことほど恐ろしいことはない。審判をまともに受けるというと、審判の後から恵みがくる。ところが、恩恵を拒んでいると、今度は怒りが、罰がくる、審判がくる。逆になってしまう。ルターが、
「神の審判を喜べ」
と言っている。そうすると、キリストは恵みをくださる。
「神さま、悪うございました」
と平伏せば、そこには必ず恵みがくる。十字架の片一方の盗賊がそれなんです。イエスに、
「私をせめても覚えてください。哀れみたまえ」
と砕けて言ったら、キリストは、
「汝、今日、我と共にパラダイスなり」
と仰った。もう片一方は、恵みのキリストに向かって、
「お前は神の子なら己と我らと救え」
と傲慢にやったので、こっちは地獄行きだ。これが人類を二つにわける。
「恵みはその人に悔改めを生ぜしめる」
とパウロが言っている。ところが、恵みを受けとらないと、審判がくる。それはそうです、恵みというのは「贖罪の十字架」ですから。贖罪の十字架を拒めば、羔羊の怒りがくる。だから、十字架というのは恐いよ。
「なんだ、十字架なんて」

と、勝手なことをやっていると、どっこいということになる。

●神の怒り

要するに、「羔羊の怒り」という言葉が、単なる言葉でなくて、いかに恐ろしい深刻な真剣な事態であるかということです。我々、信ずる者にとっては、血を流した人たちにとっては、これは

「ディバイン・リベンジ」「神聖なる復讐」

なんです。霊法が成就する世界です。とことんまで哀れもうとしているのに、赦そうとしているのに、贖っているのに、それをもなお拒んでいたら、これはどうにもならんでしょうが。

何教だって、何だっていいです、それがインチキでなければ、それは全部、天国の中に入っていきます。誰が一体、天国にいくか、それは誰も知らん。知っているのは神さまとキリストだけだ。

「あの人は天国へ行く、行かない」

と、そんなことは一つも言う必要はない。我々は、本当に自分が贖われ、また本当に人を贖いの世界にいれてあげましょう、ということだけが問題です。

ローマ書1章を見ましょう。

「16**我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる（信受する）者に救いを得さする神の力たればなり。17神の義はその福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録して『義人は信仰により**
て生くべし』とある如し。

非常に決定的な言葉です。神の義を本当に受けとる。キリストに現れた義ですよ。ルターは初めこの言葉が分からなかったわけです。

18それ神の怒りは不義をもて真理を阻む人の、もろもろの不虔と不義とに対いて天より顕る。19その故に神につきて知り得べきことは彼らに顕著なればなり、神これを顕し給えり。20それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創より悟りえて明かに見るべければ、彼ら言い遁るる術なし。

自然の世界でもってちゃんと神さまはそういうことを表しているではないかと。単にユダヤ的な面だけでなくて、パウロは既に世界的な見地からものを言っている。ここに「神の怒り」という言葉が出ているから、「羔羊の怒り」とあわせて申し上げているわけです。

21神を知りつつも尚これを神として崇めず、感謝せず、その念は虚しく、その愚かなる心は暗くなれり。22自ら智しと称えて愚かとなり、23朽つることなき神の栄光を易えて朽つべき人および禽獣・匍う物に似たる像となす。」（ロ

マ１・16～23）

偶像にしてしまっているから、とんでもないはなしだと。

福音書の中にも――ヨハネ伝は始めの方に、他の福音書では後に出てくるけれども――例の宮潔めの所にやはり怒りの事態が出ている。ヨハネ伝でいうと、２章13節からです。これは地上の羔羊の怒りの表れです。

●神の印

黙示録第７章に入ります。

1この後、われ四人の御使の地の四隅（よすみ）に立つを見たり、彼らは地の四方の風を引止めて、地にも海にも諸種（もろもろ）の樹にも風を吹かせざりき。2また他の一人の御使の、いける神の印を持ちて日の出づる方より登るを見たり、

「神の印」という言葉はコリント後書１章、ローマ書４章にも出ている。「印を帯びる」という言葉はガラテヤ書６章にも出ている。「スティグマ」です。

3『われらが我らの神の僕の額に印するまでは、地をも海をも樹をも害うな』

かれ地と海とを害（そこな）う権を与えられたる四人の御使にむかい、大声に呼ばわりて言う

神の僕の区別をちゃんとされるわけです。それまでは害うなと。

4われ印せられたる者の数を聴きしに、イスラエルの子等のもろもろの族の中にて、印せられたるもの合せて十四万四千あり。

「十四万四千」とはおもしろい。十二の自乗の千倍です。「十二」は完全を表す。それが諸々たくさんいるから、それをまた十二倍して、しかもまだたくさんいるから、それを千倍する。ということは、満ちたる事態を数的に表すなら「十四万四千」となるというわけで、何も「十四万四千」という数を言っているのではない。この数が完全を表すときの印になっているわけです。

5ユダの族の中にて一万二千印せられ、ルベンの族の中にて一万二千、ガドの族の中にて一万二千、

云々と、ずっと並べてきて、これが合わせると「十四万四千」になる。「一万二千」の十二倍です。それらに印をする。審判の時にそれが審判から抜けられるから。我々はキリストの十字架の印を帯びているわけだ。パウロがガラテヤ書６章で、

14「然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。15それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新（あらた）に造らるる事なり。16此の法（のり）に循（したが）いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫（あわれみ）あれ。

17**今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩(お)びたるなり。」**（ガラテヤ６・14～17）

世と我との関係が、真ん中に十字架があって、直接関係というわけにはいかない。「この世に死んでいる」というわけだ。

「我はキリストと共に十字架された。古き我はもはや生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」

とは、

「聖霊のキリストがわが内にありて生くるなり」

ということです。

「我れキリストと共に十字架せられたり。もはや、我れ生くるにあらず。キリスト、御霊のキリストが我れと共に、わがうちに生きたもうなり」

と。これが我々の「神の印」なんだ。こういう印（〇の中に十）を帯びている。十字架と聖霊の印だ。

●白き衣

9**この後われ見しに、視よ、もろもろの国・族(やから)・民・国語の中より、誰も数えつくすこと能わぬ大いなる群衆、しろき衣を纏(まと)いて手に棕梠(しゅろ)の葉をもち、御座(みくら)と羔羊(こひつじ)との前に立ち、**

「棕梠」というのは勝利の象徴です。

10**大声に呼ばわりて言う『救は御座(みくら)に坐したもう我らの神と羔羊とにこそ在れ』**

完璧な言い方ですね。聖霊に満ちると、聖霊の衣がスーッと被うわけだ。そうすると、夏、蚊が刺さない。ビリビリと痺れるから。本当だよ、聖霊に満たされて熱くなると。そういうのが「白き衣」です。霊衣です。

昔は、私の無教会信仰時代は、結核病棟なんかを見舞いに行くと、感染するといけないということで、マスクをしたり手を消毒液で洗ったりした。聖霊が来たら、全然その必要が自然になくなってしまった。こっちから御霊の波動が逆に向こうへ行くからね。ペニシリン以前に、私みたいな者を通して幾人の人が助けられたか。お医者さんがびっくりしたわけだ。もう手術もできないような人が病院から出てしまって、せっせっと働いている。みな御霊の力だ。

いいですか、調子が悪かったら、キリストの中に自分を本当に投げ込む祈りをしなさいよ、グーッと。もの凄い力が、熱が入ってくるから。そうすると、知らない間に治ってしまう。キリストが自ら按手してくださる。霊の手を按きたもう。こうやって片手で祈ると、キリストの手がこっちへくる。ばかになって信じ込めば、不思議なことが起きてくる。何をし

ていても、進んでいくから。

「**一切の秘訣を得たり**」

というパウロの言葉が、御霊の世界に入ると、

「そうでございます」

ということになる。行き詰まったと思ったら、どっこいというわけだ。御霊の世界はゴマかしがきかないから、本当に体験すれば、そうなっていく。

私は無教会の先生方の悪口を言っているのではない。先生方はそこまでは自分の使命としてなさった。そしたら、後の人はグングン進んで行かなければダメなんです。それをいつまでたっても、「内村鑑三先生」なんてやっているから。本当の先生はキリストだけです。親鸞が言っているとおりに、

「自分は一人も弟子がない。ただ弥陀の御もよおしによっている」

と、その通りです。

11**御使みな御座および長老たちと四つの活物（いきもの）との周囲に立ちて、御座の前に平伏し神を拝して言う、**12**『アァメン、讃美・栄光・智慧・感謝・尊貴（とうとき）・能力（ちから）・勢威（いきおい）、世々限りなく我らの神にあれ、アァメン』**13**長老たちの一人われに向いて言う『この白き衣を著たるは如何なる者にして何処より来りしか』**

妙なことを聞いている。大体分かっているんだ。

14**我いう『わが主よ、なんじ知れり』**

ヨハネは知らないわけではない。もう、表現できないから、

「あなたの御存知のとおりです。そう仰るけれども、もう御存知のとおりではないですか」

というわけだ、簡単に言えば。「なんじ知れり」という言葉はエゼキエル書37章にも出ている。

「1**ここにエホバの手我に臨みエホバ我をして霊にて出で行かしめ、谷の中に我を放（お）き賜（たも）う。そこには骨充（み）てり。**2**彼その周囲（まわり）に我をひきめぐりたもうに谷の表には骨はなはだ多くあり皆はなはだ枯れたり。**3**彼われに言いたまいけるは、人の子よこれらの骨は生くるや。我言う、主エホバよ汝知りたもう。」**

（エゼキエル37・1～3）

これです。この場合は、エゼキエルも本当に分からなかったろうね。

「**これらの骨は生きているか**」

「**あなたが御存知のことです、どうにもこっちは分かりません**」

と。この37章も凄いね。ユダヤ人というのはとにかく選びの器だよな。

かれ言う『かれらは大いなる患難（なやみ）より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり。

血は赤いのに、羔羊の血によると白くなる。これは概念の矛盾です。矛盾、逆説、背理と

いうようなところに深い真理が現れている。「大いなる患難」とはもちろん迫害です。

15 **この故に神の御座の前にありて昼も夜もその聖所にて神に事う。御座に坐したもう者は彼らの上に幕屋を張り給うべし。**

これは非常に美わしいところだね。

16 **彼らは重ねて飢えず、重ねて渇かず、日も熱も彼らを侵すことなし。**

「わが水を飲むものは重ねてもう渇かない」

とキリストが言われた。それは生命の水だから、霊水だから。医す力を持っている。カトリックで「ルルドの泉」という不思議なことが起きた。

17 **御座の前にいます羔羊は、彼らを牧して生命の水の泉にみちびき、神は彼らの目より凡ての涙を拭い給うべければなり』**

楽園の、天国の素晴らしい表現です。けれども、私は天国にも涙はあると思います。それは感激の涙、喜びの涙です。

●白衣紋の大集団

藤井先生の詩の一節を読みます。

……

この白衣紋の大集団よ
彼らは誰びと、何処よりか
地の東よりまた西より
各々己が十字架を負ひ
遑を生げて彼らは発った。
辿りし道は狭道よりもなおかつ狭く
門の上には記して「大いなる患難」とあった。
げに羔羊の架かり給ひし
その十字架を己がものとし
彼の苦難に与かりながら
また木の上に注ぎ給へる
紅の血に総身来りて
衣の染みを彼らは洗ふた。
雲の柱は昼に導き
炎の柱は夜に照らした。
なお集会の幕屋なるとき
雲は上よりこれを覆いて
エホバの栄光なかに満ちた。

……
御座の前に在ます羔羊
瞳やわらかに群を顧み
先手に立ちて進み給へば
群団ことごとく従ひ動き
生命の水の泉に着きて
かつ汲みかつ飲む、満ち足ろうまで
嗚呼、この甘き滴りをもて
潤い満たぬ何の渇きぞ
泉は真理の御神にあれば。
嗚呼、秋の夜の野草に宿る
白露の如く今この山に
数え尽くせぬ顔また顔の
いずれひとつか地にありしころ
腸（はらわた）よりぞ湧きしと思う
涙の跡を残さぬがあろう。
その源を封ずるために
人の手はあまりにも短きを
験して彼らはつぶさに知った。
己が心の的に触れ得ぬ
虚しきそれ矢を蔑（さげす）みつつ
地の慰めを彼らは拒んだ。
ただ柔らかき時のなだめに
しばし思いを遠ざくるとも
何か癒えよう傷そのものは。
さはれ善き日に主はついに臨んだ。
涙の壺を造り給ひし
能はぬことなき御手は今伸び
見よ、仰ぎみる凡ての目より
涙ことごとく拭ひ給へば
朗らかに瞳みな輝かん。
……
これがここの所を歌ったところの詩です。

●十字架道は同時に聖霊道

とにかく、地上でもって何らかの意味において、艱難を、十字架を負っていかない者は天国に入れないわけだ。我々はキリストに十字架で担われました、贖われました。我々も、

「己が十字架を負いて我に従え」

と。天国への道は十字架道というわけです。しかし、この十字架道を我々は聖霊の力でもって進んで行くことができる。ということは、十字架道は人を恵福（さいわい）にしていく道、人に恵みを与える道なんです。ただ我慢していく道ではない。だから、十字架道を歩む人には本当の歓喜がある。人を喜ばせることが本当の喜びなんです。マイホーム主義ではない。それがこの十字架道です。十字架道は同時に聖霊道と言っていい。各人の歩くのは、本当は十字架路なんです。道ではない。十字架の小路です。一人ひとりは絶対にその人でなければ歩けない路（みち）を神さまに歩かされる。それがキリストの十字架道、キリストの聖霊道に即するわけです。

「我は道なり」

というキリストは道の方だ。その天道に即するところの、我々は地路であるわけです。地路即天道、天道即地路という。そういう歩き方が本当の実存的な歩き方です。それが今言った、

「大いなる患難より出できたり、羔羊の血に己が衣を洗いて白くしたる者なり」

ということ。本当のパラダイスです。

地上は「悪の幕屋」です。上にひっくり返って逆さまに「パラダイス」がある。そして、「最後の審判」の時がやってくる。地獄の方は「第二の死」なんだ。これからこっちが本当の天国です。このパラダイスは「仮天国」です。我々は始めしばらく仮天国に入るわけだ、キリストを信じて十字架で贖われた者は仮天国から、今度は「本天国」へ入る。私の図でいえば、黙示録が言っているところの「新天新地」はここ（本天国）です。歴史はこのように進んでいる。神の国が向こうからやってくる。この世を支えているものはキリストの十字架一本。このパラダイスが「十四万四千」だ。

「十四万四千」という数字でもって表されているところの、満つる時がある。即ち、キリストの証人が満つる時が来ると、最後の審判がくるというわけだ。

「もう少し待て、お前たちも十字架道を歩いてこい」

と。聖霊をいただいたら、聖霊道と聖霊路というものは同じことです。聖霊がなかったら、とても歩けません。

「艱難を喜べ、喜べ」

ということは、聖霊だから言える。

「聖霊、汝らの上に止まりたまえばなり」

とペテロが言っているでしょ。

「12**愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火のごとき試練（こころみ）を異なる事として怪しまず、13反ってキリストの苦難（くるしみ）に与（あずか）れば、与るほど喜べ、**

「十字架を負わされるほど喜べ、聖霊が来るから大丈夫だ」と。

なんじら彼の栄光の顕れん時にも喜び楽しまん為なり。14もし汝等キリストの名のために謗（そし）られなば幸福（さいわい）なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊なんじらの上に留まり給えばなり。」（ペテロ前書４・12～14）

素晴らしい言葉だね。もうやり切れないで、楽しくて語っているのだから、ペテロでもヨハネでもパウロでも。だから、この使徒たちの次元の中に入れば、聖書の言葉は読んでいると、すぐ力がきて、読むことが直ちに祈りであるというわけです。電車の中でもこういうところを読んで、目をつぶってごらんなさいよ、力がくるから。電車の中でも天国になってしまう。

混沌と矛盾だらけの、しょうがないこの世の中で、御霊の力がなかったら、本当の意味で生きていけませんよ。御霊の力があれば何でもござれ。いろいろな事にでっくわせばでっくわすほど、逆に力がきますから。それは本当にそうです。だから、ありがたくてしょうがない。

「8**愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、千年は一日のごとし。9主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うがごときにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。**

正にこれですね、少し待っていろと。

10**されど主の日は盗人（ぬすびと）のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とその中にある工（わざ）とは焼け尽きん。11斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔（けいけん）とをもて、12神の日の来るを待ち、之を速（すみや）かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。13されど我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。」（ペテロ後書３・８～13）**

ヨハネの黙示録と相通ずるところの言葉です。

召団の皆さんは本当に選びの器ですから、この使徒的な次元の世界に在って身証せずんばあらず、というわけです。